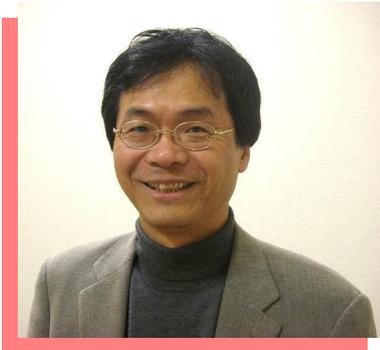


男女共同参画に関するミニコラムVol.3

～ 北欧では、家事育児や介護の経験が、管理職にとって

非常に有益だと考えられている～



執筆 広岡 守穂さん

(第9期羽村市男女共同参画推進会議委員、中央大学法学部教授)

北欧では、家事育児や介護の経験が、管理職として仕事をする上で非常に有益だという考えが、経営者の間で広がっている。本当か、と思われるだろうが、本当である。経営コンサルタントもそういう考えでアドバイスしている。

管理職はいろいろな業務を同時進行でこなさなければならない。それに部下も人間だから、言うことを従順に聞いてくれるとは限らない。これは家事をこなしたり介護や育児に関わったりする時に、誰もが経験することと同じである。なので管理職たる経験を積む上で、家事育児や介護の経験は非常に有益なのだという訳である。

スウェーデンでは、こういう考えを「ライフ・パズル」という言葉で概念化している。日本でいう「ワーク・ライフ・バランス」とほぼ同じ意味である。

「魔の2歳児」という言葉がある。反抗期の子どもは親が泣きたくなるくらい難しい。父親はちゃんと相手をしているだろうか。母親任せにしていないだろうか。おしこの時はおしめの取替えをしても、ウンチの時は母親に任せたりしていないだろうか。料理でも家事でも、てきぱきこなすためには、同時にいくつかのことを進めていく手順が大事だ。余っている野菜をどう使い切るか、そのために今日の夕ご飯はどんな献立にするか。子どもをあやしたり宿題をさせたりしながら、夕食を作り洗濯機を回す。母親ならてんでこ舞いしながら日常的に経験していることだ。また介護は人間力が試される究極の試練だ。そういう修羅場をくぐった者こそ、管理職たるにふさわしいのではないだろうか？

母親が苦悩しながら右往左往しているのを尻目に、寝っ転がってテレビを見ていたら、それは「男がすたる」というものである。「聡明な女は料理がうまい」という言葉がある。もちろん聡明な男性も料理が上手でなければならないのである。これが男性にとっての、本当の男女共同参画である。

羽村市企画政策課企画政策担当
電話：042-555-1111（内線367）
ファクス：042-554-2921
メール：s101000@city.hamura.tokyo.jp